
1 21世紀の実験分析化学

1.1 化学分析の変貌	1
1.1.1 分子認識化学の進歩.....	1
1.1.2 化学センサーの進化.....	4
1.1.3 マイクロチップ分析法の進展	10
1.2 物理分析の変貌	14
1.2.1 ナノサイエンス・ナノテクノロジーと分析化学	14
1.2.2 レーザー分光分析法の進歩	21
1.2.3 分離化学と分離力学	25

2 試料のサンプリング・前処理

2.1 無機試料	31
2.1.1 試料の採取、前処理に関する用語	32
2.1.2 固体試料	32
2.1.3 液体試料	39
2.1.4 気体試料	47
2.2 有機試料	51
2.2.1 有機試料処理法の概要と留意点	51
2.2.2 試料前処理法	53
2.2.3 各種試料のサンプリング・保存と前処理	68

3 分離分析

3.1 溶媒抽出	79
3.1.1 分配平衡と抽出速度	79
3.1.2 抽出試薬・金属抽出	85
3.1.3 超臨界流体抽出	98
3.1.4 生体分子抽出	103
3.1.5 新抽出系	108
3.2 クロマトグラフィー	120
3.2.1 ガスクロマトグラフィー	120
3.2.2 高速液体クロマトグラフィー	129
3.2.3 キャピラリー電気泳動	151

4 熱 分析

4.1 热分析総論	167
4.2 超高感度熱分析	169
4.2.1 従来型の熱分析装置の高感度化	169
4.2.2 コンピュータ利用による高感度化	170
4.2.3 超微細加工利用によるチップカロリメーター	170
4.2.4 走査型プローブ顕微鏡の利用	171
4.2.5 共振周波数測定を利用した超微量熱重量測定	172
4.2.6 まったく別タイプの超微量熱分析	172
4.3 位置情報をもつ熱分析	174
4.3.1 走査型熱顕微鏡	174
4.3.2 赤外線カメラを用いた2次元熱分析	175

5 電気化学分析

5.1 ボルタンメトリー	179
5.1.1 ボルタンメトリーのための電気化学測定系	180
5.1.2 ボルタンメトリーのための実験構成	182
5.1.3 ボルタモグラムの基本形	184
5.1.4 ボルタモグラムの測定例	189
5.2 アンペロメトリー	199

5.2.1	Clark 型酸素電極(ポーラログラフ酸素電極)	200
5.2.2	回転円盤電極・微小電極	202
5.2.3	膜被覆電極	203
5.2.4	酵素電極	204
5.2.5	メディエーター型酵素電極：第二世代型酵素電極	205
5.2.6	フロー系における測定	206
5.2.7	酵素触媒反応の速度解析	207
5.3	ポテンシオメトリー	209
5.3.1	はじめに	209
5.3.2	液膜イオン選択性電極	211
5.3.3	イオンサイズを認識する固体膜イオン選択性電極	219
5.4	分光電気化学法	221
5.4.1	透過法	222
5.4.2	反射分光法	223
5.4.3	電位変調分光法	224
5.4.4	非線形分光法	227
5.4.5	顕微ラマン分光法	230
5.4.6	準弾性レーザー散乱法	231

6 分子分光分析

6.1	吸光光度法	233
6.1.1	紫外・可視分光法	233
6.1.2	赤外分光法	239
6.2	蛍光光度法	250
6.2.1	電子的励起状態からの諸過程と蛍光	250
6.2.2	装置と測定法	252
6.2.3	蛍光分析	253
6.2.4	顕微蛍光分光分析	256
6.3	ラマン散乱法	260
6.3.1	ラマン散乱法の特色	261
6.3.2	ラマンスペクトルの例	263
6.3.3	いろいろなラマン散乱法	264
6.3.4	ラマン散乱の実験法	267
6.4	化学発光法	270
6.4.1	はじめに	270

6.4.2 化学発光過程と測定	271
6.4.3 化学発光を用いる分析法	272
6.4.4 実 施 例	274
6.5 キラル分光分析	276
6.5.1 円二色性分光	276
6.5.2 振動円二色性分光	279
6.5.3 発光円二色性分光	282
6.5.4 旋光度分析, 旋光分散	287
6.5.5 分子集合系および固体のキラル分光分析	288
6.5.6 界面のキラル分光分析	289
6.6 近接場分光	294
6.6.1 はじめに	294
6.6.2 近接場顕微鏡	294
6.6.3 近接場顕微分光法	296
6.7 1分子分光分析	303
6.7.1 はじめに	303
6.7.2 基本的な蛍光パラメーター	304
6.7.3 吸光係数 ϵ , 吸収断面積 σ , アインシュタインの B 係数	305
6.7.4 1個の分子による光吸収と蛍光放出	307
6.7.5 吸収の飽和による蛍光の飽和	307
6.7.6 色素分子の光退色と蛍光集光効率	309
6.7.7 1分子蛍光寿命測定	312
6.8 光熱変換分析	318
6.8.1 はじめに	318
6.8.2 各種の光熱変換分光法と特徴	318
6.8.3 热レンズ分光法と光誘起レンズ効果	321
6.8.4 光誘起レンズ効果と顕微・超高速分光測定	324

7 原子分光分析

7.1 原子吸光法	327
7.1.1 はじめに	327
7.1.2 水素化物生成	328
7.1.3 原子化方法(原子吸光測定)	331
7.1.4 水素化物生成-原子スペクトル分析の感度(検出限界)	332
7.1.5 水素化物生成-原子吸光分析による化学種分析	333

7.1.6 おわりに	339
7.2 炎光・発光度法	340
7.2.1 分類	340
7.2.2 化学炎、高温炉発光分析法	341
7.2.3 アーク放電発光分析法	342
7.2.4 スパーク放電発光分析法	344
7.2.5 グロー放電発光分析法	347
7.2.6 マイクロ波誘導プラズマ発光分析法	350
7.2.7 レーザー誘起プラズマ発光分析法	352
7.3 プラズマ発光分光法	354
7.3.1 プラズマ発光分析用励起源	354
7.3.2 ICP 励起源	355
7.3.3 試料導入部	357
7.3.4 分光器	357
7.3.5 ICP 発光分析法の特長と検出限界	361
7.3.6 ICP 発光分析における干渉	363
7.3.7 定量分析	365
7.3.8 応用	366
7.4 ICP-MS	371
7.4.1 原理	371
7.4.2 ICP-MS の装置	372
7.4.3 ICP-MS の特徴	373
7.4.4 ICP-MS 測定における干渉とその対策法	374
7.4.5 定量分析	378
7.4.6 応用	380

8 磁気分光分析

8.1 ESR 法	387
8.1.1 標準分析法：X バンド定常法	387
8.1.2 種々の ESR 分析法	392
8.2 NMR 法	397
8.2.1 はじめに	397
8.2.2 装置、測定	398
8.2.3 NMR より得られる情報	401
8.2.4 ^{13}C -NMR	404

8.2.5 ^{31}P -NMR	405
8.2.6 多次元 NMR	405
8.2.7 実験例	407
8.2.8 固体の NMR	409
8.2.9 NMR イメージング	409

9 質量分析

9.1 イオン化法	414
9.1.1 電子イオン化	414
9.1.2 化学イオン化	415
9.1.3 高速原子衝撃法	416
9.1.4 マトリックス支援レーザー脱離イオン化	416
9.1.5 DIOS	418
9.1.6 エレクトロスプレーイオン化	418
9.1.7 ナノエレクトロスプレーイオン化	420
9.1.8 そのほかのイオン化法	420
9.2 質量分離部	421
9.2.1 磁場型質量分析装置	421
9.2.2 四重極質量分析計(QMS)	424
9.2.3 イオントラップ質量分析計(ITMS)	425
9.2.4 飛行時間型質量分析計(TOF-MS)	427
9.2.5 フーリエ変換イオンサイクロトロン共鳴質量分析計(FT-ICR-MS)	429
9.2.6 検出器	431
9.3 生体分子の質量分析	432
9.3.1 生体分子の質量	432
9.3.2 タンパク質	434
9.3.3 ペプチド	437
9.3.4 MS/MS 法	438
9.3.5 安定同位体を用いる定量	439
9.3.6 LC-MS	441
9.3.7 GC-MS	441
9.4 合成高分子の質量分析	442
9.4.1 合成高分子のイオン化	442
9.4.2 ESI-MS	443

9.4.3 MALDI-MS	447
9.4.4 おわりに	453

10 高エネルギー分光分析

10.1 X線分光分析	457
10.1.1 はじめに	457
10.1.2 蛍光X線分析	460
10.1.3 シンクロトロン放射光励起蛍光X線分析	464
10.1.4 全反射蛍光X線分析	465
10.1.5 X線吸収分光法	466
10.1.6 EPMAによる状態分析	468
10.1.7 まとめ	469
10.2 電子分光分析	469
10.2.1 X線光電子分光	469
10.2.2 オージェ電子分光	481
10.3 放射化分析	486
10.3.1 はじめに	486
10.3.2 放射化分析の原理	486
10.3.3 放射化分析の種類と特徴	488
10.3.4 品質管理	490
10.3.5 今後の展開	491

11 表面・界面分光分析

11.1 反射分光法	493
11.1.1 反射とフレネルの式	493
11.1.2 2および3相系界面の反射率の入射角依存性	495
11.1.3 ATR法における測定量	496
11.1.4 ATRスペクトルの測定	497
11.2 光散乱分光分析	498
11.2.1 はじめに	498
11.2.2 測定原理	499
11.2.3 測定装置	501
11.2.4 測定応用例	502
11.2.5 今後の展望	504

11.3 非線形分光分析(SHG, SFG)	505
11.3.1 はじめに	505
11.3.2 原理および特徴	506
11.3.3 測定装置	508
11.3.4 測定例	508
11.3.5 おわりに	511
11.4 表面プラズモン分析	512
11.4.1 はじめに	512
11.4.2 用途	513
11.4.3 測定原理	513
11.4.4 光学系	516
11.4.5 装置構成	517
11.4.6 測定システム	517
11.4.7 金基板センサー	518
11.4.8 リガンドの固定化	518
11.4.9 表面プラズモン共鳴現象の測定	520
11.4.10 応用	521
11.5 界面反応分光分析	525
11.5.1 液液界面の単一分子検出	525
11.5.2 第二高調波発生-円偏光二色性分光法	529
11.5.3 遠心液膜法	534
11.5.4 そのほかの液液界面反応分光法	536

12 分子認識

12.1 無機イオンの分子認識	539
12.1.1 無機カチオン	539
12.1.2 無機アニオン	547
12.2 生体分子の分子認識	552
12.2.1 はじめに	552
12.2.2 認識と情報変換	554
12.2.3 アニオン認識	554
12.3 バイオイメージング用分子プローブ	563
12.3.1 蛍光プローブ	563
12.3.2 イオンや低分子を測定する蛍光プローブの分子設計	564
12.3.3 代表的な蛍光プローブ	568

12.3.4 タンパク質ベースの蛍光プローブ	570
12.3.5 細胞内カルシウムのイメージング	572
12.3.6 展望	572
12.4 ナノ粒子分析試薬	574
12.4.1 金ナノ粒子	574
12.4.2 イムノクロマトグラフィー	579
12.4.3 金ナノロット	580
12.4.4 量子ドット	584

13 マイクロ分析

13.1 マイクロTAS	587
13.1.1 マイクロ化学チップに集積化されたコバルト(II)イオンの湿式分析システム	587
13.1.2 マイクロELISA法によるヒトイントーフェロンガンマの定量	600
13.2 微粒子分析	605
13.2.1 レーザー光泳動	605
13.2.2 誘導泳動	608
13.2.3 磁気泳動	611
13.2.4 電磁泳動法	616

14 顕微・形態分析

14.1 共焦点蛍光顕微鏡	623
14.1.1 共焦点蛍光顕微鏡の原理と装置	623
14.1.2 共焦点蛍光顕微鏡の空間分解能	626
14.1.3 共焦点蛍光顕微鏡の測定例と応用	629
14.2 新しいレーザー顕微鏡	632
14.2.1 はじめに：非線形光学現象を利用したレーザー顕微鏡	632
14.2.2 第二高調波顕微鏡	632
14.2.3 コヒーレントアンチストークスラマン散乱顕微鏡	637
14.2.4 まとめ	641
14.3 電子顕微鏡	642
14.3.1 はじめに	642
14.3.2 電子レンズと電子顕微鏡の特徴	644
14.3.3 走査型電子顕微鏡、XMAの分解能と電子銃	645

14.3.4 今後の電子顕微鏡法を占うキーワード	646
14.4 走査プローブ顕微鏡	651
14.4.1 はじめに	651
14.4.2 走査トンネル顕微鏡(STM)	652
14.4.3 原子間力顕微鏡(AFM)	654
14.4.4 原子・分子の同定	656

付録 分析データの統計処理と検定

1 分析プロセスの不確かさ	661
2 系統誤差とランダム誤差	662
3 真の値と偏り、標準物質	663
4 正規分布	663
5 サンプリング分布と母集団の平均値の信頼区間	664
6 系統誤差の検定(<i>t</i> 検定)	666
7 二つの分析方法の測定値のばらつきの比較(<i>F</i> 検定)	667
8 異常値の検定	667
9 適合度検定(χ^2 検定)	668
10 判定限界、検出限界、定量限界	668
11 トレーサビリティ	670
12 最後に	670
索引	673